

〔目的〕 戦後の個人主義の主張により、個人的に、特に子供に対してはそれぞれの個室が確保されるようになった。しかし、一方でこの傾向は家族から個人の孤立を助長することになり、家族が集って生活するという本来の住居の目的が、失われていきつつある。家族間のコミュニケーションの役目を果たすだんらん行為については、すでに多くの研究が行われてきているが、再度、現在だんらんが家族にとってどのような形で存在し、またどのような役割をもっているかを認識し、だんらん行為のための生活空間のあり方を追求しようとするものである。第1報では、各個人の住戸内における生活時間とだんらん行為時間の現状についての分析結果を報告する。

〔方法〕 女子大学生のいる家庭を対象に、アンケート及び各家族の生活時間記入調査を行った。調査期間は1981年7～9月。調査表配布数319件、回収数234件で回収率は73.4%である。なお今回は回収調査世帯より東京・東京近郊（東京、神奈川、千葉、埼玉）および他府県各91件を任意抽出計182件について分析したものである。

〔結果〕 調査対象家族——家族人数4人、両親＋子供2人の標準的核家族であり、世帯主の職業は管理職が多い。また13.2%の主婦が有職（個人業主、自営業）。住戸内時間——男子は父親、18才以上、18才未満の子供と年齢が下がるにつれて住戸内時間が多くなる。女子では母親が一番多い。しかし女の子の場合年齢による差はみられない。東京・東京近郊と他府県では多少差がみられる。家族が集まる時間——1時間以上2時間未満の家庭が多く、東京・東京近郊世帯よりも他府県世帯の方がその時間量は多くなっている。